



一生まれる、交流の場

どうすればアトリウムに人を集められるか。

私たちはこれを徹底的に考えました。今回のリニューアルの目的は、いままで閑散としていたアトリウムに活気をもたらすこと。

そこで、**何度見ても飽きない変化のある参加型の作品**を目指しました。作品が変化することで見る人は常に新しい発見をし、何度も楽しむことができます。さらに、参加型で見る人が作品に影響を与えることで作品を身近なものに感じます。機-tree-は参加者が増えれば増えるほど華やかな作品になります。**参加者同士で作品を作り上げてゆく**のです。

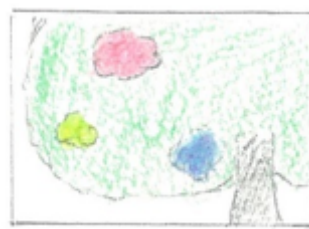
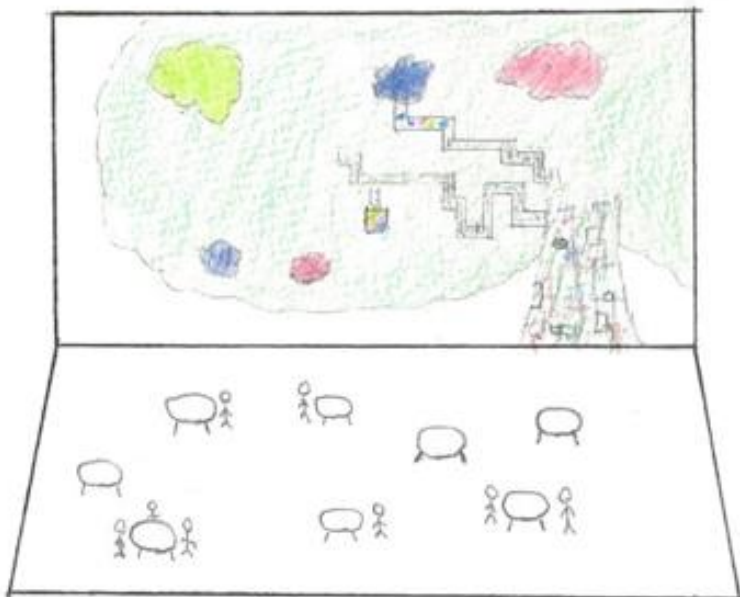
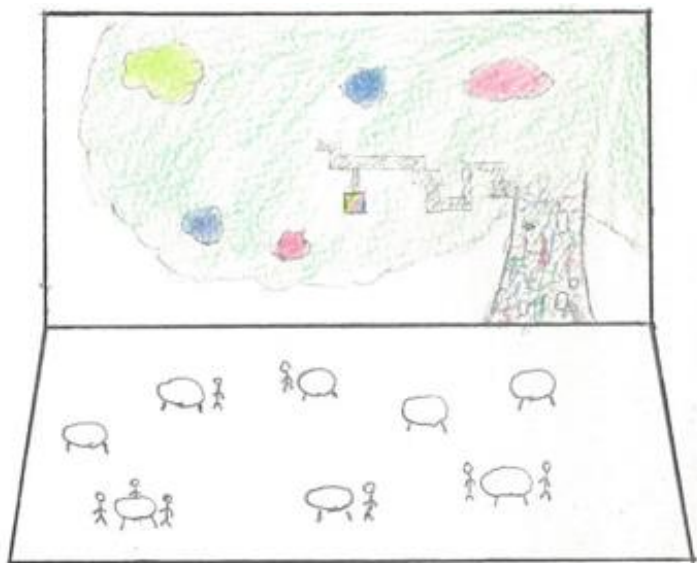
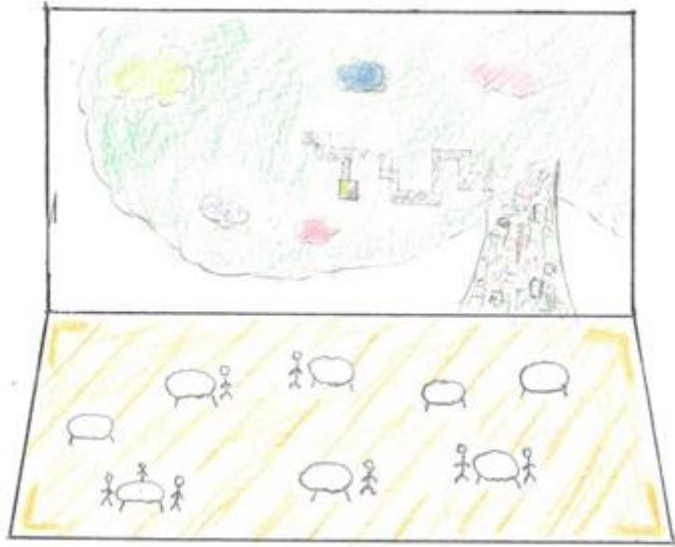
作品タイトルの「機-tree-」は”き”と読み、作品の見た目である木という意味以外に、機という漢字に含まれる「物事のきっかけ」という意味が込められています。

機-tree-が人と人の出会いのきっかけとなり、**これまで人影が少なかったアトリウムに、交流の場が生まれます。**

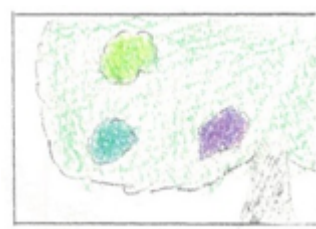
① 場所を探知して変化

プロジェクションマッピングにより投影される機-tree-は、建設される壁の前の空間を利用して、映像が変化します。この空間は普段机やいすが配置される予定のため、そこに集まる人をセンサーで探知します(図中オレンジのエリア)。

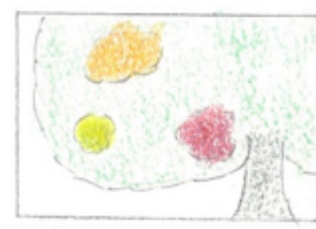
探知した場所に対応して機の葉っぱに色が付き始めます。この色は四季に対応した色になっており、季節による変化を楽しむことができます。そのため、人がたくさんいるほど作品に色どりが増していきます。



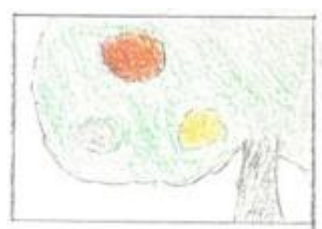
春



夏



秋



冬

色が付き始めるとセンサーで探知した人がその場にいる間、その色は時間が経つにつれ濃くなっていきます。

人を探知し始めて5分以上経つと色の濃さは最大に達します。すると、機の幹から色のところまで枝が伸びてきて、色からエネルギーを吸収します。吸収されたエネルギーはキネティックウォールの真ん中に描かれた機の実の中に入ります。

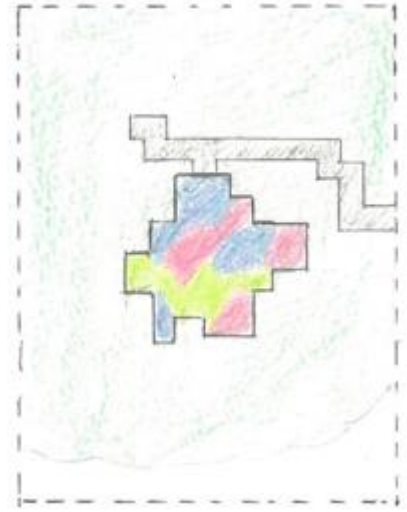
② 機の実の成長



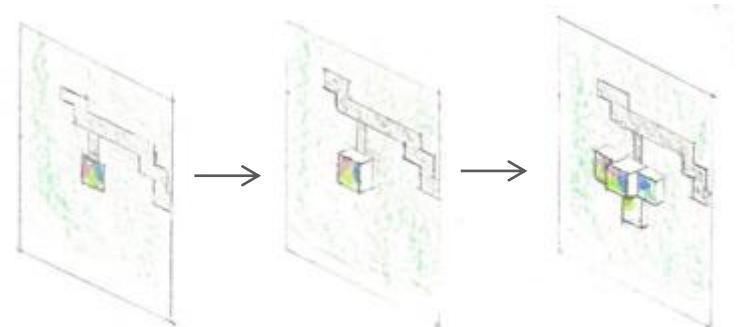
キネティックウォールの真ん中には木の实である“機の実”が描かれます。これはキネティックウォールの内照LEDにより描かれ、周囲の映像とは異なる存在感を放ちます。機の実の色は葉っぱと同じく四季によって異なります。



2ページで説明した、葉っぱから吸収されたエネルギーはこの機の実の栄養となります。機の枝、幹を伝って取り込まれます。また、機の実が成長するにつれてキネティックウォールの機の実に当たる部分が手前に動いていきます。



エネルギーを吸収すると機の実は大きくなります。そのため、機を見る人が多ければ多いほど早く大きく育ちます。



機の実の成長過程



エネルギーをたくさん取り込んだエネルギーは最終的に破裂します。破裂すると、円形の波が広がり、キネティックウォールが波を表すように動きます。波がキネティックウォールの範囲を出るとプロジェクションマッピングで波を描きます。



破裂すると波の内側は機の実の色の塵を巻き上げ、機を破壊します。一瞬、壁からは何もなくなるのです。何も描かれなくなった壁には、新たに機が生えてきます。幹の部分から配線が光りながら機が構成されていきます。葉っぱの色はすべてリセットされ、新しい作品として再び変化が始まります。



③ 自然と機械の幹

高層ビルが立ち並ぶ新宿。

その中に工学院大学があります。

この人工物ばかりの街では感じるのが少ない自然、四季を、**作品を通して体感**できるようにしました。

また、木の幹を機械にすることで作品に理工系大学である**工学院大学らしさ**を演出しました。鉄でできていて、配線などが付いています。

この作品を見た人たちが後で思い出したときに、

“工学院大学にあった”作品

として記憶に残してもらいたい、という考えからこのアイディアは生まれました。

機の枝も鉄でできていて、壁のパネルの溝に沿うように生えています。これにより、特徴的なプロジェクションエリアの**パネルの形を活かし**ながら、機械感を表現することができます。機の実がついている枝は常に表示されますが、ほかの枝は葉っぱのエネルギーを吸収するときだけ表示されます。

機械の幹から自然の葉っぱが生えているという少し不思議な見た目をした機-tree-が、新宿キャンパスに新たな交流の場を作り出します。

